

翌朝、カレンダーは貫太によつてめくられ、凜子にとつて、運命の一日がスタートした。

ホテルの部屋に入つてすぐのところには、日めくりのカレンダーが掛けられていた。貫太はそれを勢いよく、ビリリと破いた。

大安。今日の言葉、には「答えはあなたの心が知っています」と記されていた。

凜子は前の晩、一睡もしていないにも関わらず、気はぴんと張り詰め、頭はいつになく冴えていた。軽く朝食をとり、ホテルのロビーで貫太に見送られる。

今日はなにをして過ごすの、と聞くと、貫太は大きなあくびをしたあと、

### 「秘密」

と答えた。そしてそのすぐあとに「知りたい？」と言つて、凜子の顔を優しげな目で覗き込んだ。

「あそこで君へのプレゼントでもさがしているよ」

彼は、ホテルを出てすぐのところにある小さな庭の一角を指さした。

貫太の視線の先に、綿あめのような輪郭をした

緑の空間が見えた。

もしかしたら貫太はすべてを知っているのかもしれない。凜子がこれから誰に会いに行くのかも、何をしようとしているのかも。

突如、そんな思いが凜子を襲う。

だがすぐに、いや、まさかそんなはずはない、と声を出して否定してみる。

何時間でも一つのこと熱中できる目の前の男が、妙な詮索をするはずがない。そこまで想像力をたくましくさせるはずがない。

「行ってきます」

貫太と目を合わせずに、ついに凜子は肩にバッグを掛ける。笑顔は引きつっていないだろうか。声は震えていないだろうか。胸の鼓動は速まり、のどは乾き切っていた。

貫太に見送られ、凜子は未来へと足を踏み出した。過去を自分のなかで清算することこそが、未来に向かうということなのだ、と自分に言い聞かせながら。

振り返ると、貫太がこちらを見て手を振っていた。邪気のない心からの笑顔が、凜子の胸にぐさ

りと突き刺さった。

「ごめんなさい」

過去を清算するなど、都合のいい言葉で片づけながら、いまから自分がしようとしていることはいったい何だろう。再会か、冒険か、それとも裏切りか。

それでも、凜子は一度決心したのだ。もうあとには引けない。とにかく計画したことを実行に移すのみだ。たとえば、計画通りに事が進まなかったとしても、貫太には友だちに会いに行くと言えてあるのだから、最後まで嘘をつきとおさなければならぬ。

旅行前までは、移動手段はバスか電車にするつもりだったが、急きよ変更し、凜子はレンタカーを借りることにした。

前もって予約してあったレンタカーの会社へ出向き、自分が日ごろ運転しているのに近い大きさや形の車を選んで、乗り込む。

国道をまっすぐに進む。東へ、東へと車を走らせた。

さきほどまで心には霧がかかり、もやもやとしていた凜子だったが、車を走らせたたん、その霧はどんどん晴れていった。

赤信号で車が止まった際には、周りの景色を楽しんだ。手書きされた道案内の看板、一両編成で走る電車、産直市場で売られている野菜の山。なにもかもが凜子の目には新鮮だった。

佑介の実家の場所を、はっきりと把握しているわけではなかった。佑介と交わした会話と自分の記憶力だけが頼りだったが、その場所に行きつくことができるだろうかという不安は、まるでなかった。

ゴールデンウィーク中だというのに、車はすすいと進み、空は雲ひとつなく晴れ渡っていた。すれ違う車の中で談笑する家族やカップルは皆、笑顔を浮かべていた。窓から入り込む風は新緑の香りがし、凜子の心を落ち着かせた。

凜子には、この世のすべてのものが自分の背中を押してくれているように思えてならなかった。

街から離れ車を進めるたびに、周りの風景は、ますますのどかになっていく。田園が広がり、海が

見え、犬を連れて小路をゆつくりと歩むひとが見える。

どれくらいの時間が過ぎただろうか。

二つ並んだ小さなログハウスが見えたところで、凜子は、はつとする。

佑介の実家へと続く道は、このログハウスのある次の角を、まず右に曲がらなくてはならない。

一度は記憶から消そうと試み、心から追い払ったはずの土地なのに、道順や目印をしつかりと覚えていたことが不思議だった。

渋滞に巻き込まれずに、いままで案内スムーズに進んでいた車が、徐々にのろのろ運転になる。東京での自分なら、いまごろイライラしながらハンドルを握っており、助手席に座る貫太に、なだめられているところだ。

「これこれ、お嬢さん。狭いニッポン、そんなに急いでどこへ行く」

悠長にそう言われるたびに、凜子はいつも自分の気持ちを静め、せっかちな性格を改めようと努めてきた。

そんなとき凜子は、特に思うのだ。気が短く、強情で頑固。でも心の中はガラス細工でできているようなわたしには、貫太のようにおおらかで、心の広い伴侶が必要なのだ、と。

進んでは止まり、ブレーキをゆるませてはまたアクセルを踏み込む。単調で退屈なくり返しのなかで、凜子は深呼吸をくり返し、苛立たぬように自分を落ち着かせた。

ふと、真横に立つ電信柱に目をやると、お祭りのご案内、と書かれたポスターの文字が目飛び込んでくる。

お祭りか。

いま頃、何の祭りがあるのだろうか、と目を凝らすと、お祭りと書かれたすぐ下にちいさな文字で「縁日ごっこ」と記されていた。

凜子が佑介の実家を訪れたのは、ちょうど秋祭りの数日前だった。

それまでは、祭り、と聞くと、そわそわして落ち着かず、居ても立ってもいられない心境だったが、佑介の実家で秋祭りを体験して以来、祭り、とい

う言葉を耳にするたびに、凧子の心に暗い影が射しこむようになった。

目を閉じて耳を澄ませば、いまにも笛や太鼓の音が聞こえてきそうだ。

ドスンとおなかの底にまで響いてきそうな威厳ある太鼓の音、男たちが神輿を担ぎ、すわった目で歌う伊勢音頭。

あの頃、佑介の地元でも、祭りに向けて太鼓や歌の稽古が連日行われていた。

彼もお祭りに参加するため、祭り当日の打ち合わせや、歌の練習のために、夕食をすませると、毎夜出かけて行った。

佑介のいない彼の実家で、凧子は佑介の家族や数日前から訪れている親戚たちとともに、夜の数時間を過ごさなければならなかった。

知り合いがいない輪の中で過ごす時間は、凧子にとって耐えがたいものだった。

佑介の実家に集まったのは、二十人ほどで、女性よりは男性のほうが多かっただろうか。

女たちは凧子の名前を決して口にせず、「あのう」とか「ちよつと」とか「すみません」と、小

な声をかけてきた。

一方、男たちは凜子のことを「東京から来た人」とか「佑介のええひと」という言葉で呼びかけた。

そう呼ばれるたびに凜子は居心地が悪く、じつと唇をかみしめているしかなかった。

「同じだわ、わたしの田舎のひとたちとまったく同じ」

凜子は心の中でそつと呟いた。

ただの一度も名前でも呼びかけない。ひとと話するときには目を合わせない。知らないひととは極力話すのを避け、当人がいなくなつてから、そのひとのうわさ話を楽しむ。

田舎の風習や人間が嫌で、東京に逃げてきたのに、凜子はまた恋人の実家で、昔自分が味わつたのと同じ体験をしている。そして、そんな土地に嫁入りをしないかと誘われているのだ。

田舎特有の無遠慮な親近感と、自分と同じ種類の人間しか受け入れないぞといわんばかりの島国根性。

「ああ」と凜子は小さく叫んで、こげ茶色の天井を仰いだ。幾筋もの煙草の煙が縦にまつすぐの<sup>8</sup>の



ぼつていくのが見える。

(以上6月20日放送分)